

## ワークショップ「核をめぐる文学的想像力」

橋本雄一

2023年日本比較文学学会大会（東京外国語大学が会場）のシンポジウムに始まる問題意識とテーマを引き継いで、開催された。第二次大戦～冷戦期～現在に至る核兵器あるいは核エネルギーと人間の問題を、文学テキスト・詩的言語はどのように表現し、状況とどのように関係してきたか、である。これを考える場として、この研究ワークショップはこれまでに院生研究報告会も開催した。それらに連なる今回の場であった。

当日はまず、ブルナルカーシュ（実践女子大学教員）が報告。1950年代のチェコにおける核兵器開発反対・戦争反対の署名運動などに触れつつ、ヒロシマ・ナガサキの原爆被爆体験、54年第五福竜丸被曝事件、原水爆禁止運動など世界的な問題共有の集会、、、に刺激された詩人とその詩作品が紹介された。フルビーンの詩集『ヒロシマ』（48年）のほか、ネズヴァル、イエレンといった詩人による50年代の作品である。またカポウンのように原子爆弾を「世紀の調弦機」と名づけ、ソ連核開発の下の東欧社会にあつて、米国の核開発に対抗する意味から核「礼賛」の文学言語を創作した例も紹介。さらにスロヴァキア語の詩人による原爆関連の作品も紹介した。

続いて、西岡あかね（東京外国語大学教員）は、東ドイツの作家、シュテファン・ヘルムリン「鳥と実験」、ドイツ語による複数の詩人による「反核」詩集などを紹介。かつ関連横断の資料として、「ミュンヘンでも核爆弾が爆発したら」という放射能拡散影響の予想地図が、当時の東西冷戦というジオポリティクスを反映した非科学的なそれであることなどを指摘。また同時代の地球にあつては、差異のエリアで局所的に戦争使用の、あるいはエリア横断的な実験・事故としての、核爆発が設定されたが、それらが横断的にある種共有された===詩・童話などの文学表現に結実した、のはなぜかと提起した。

当日は会場対面とオンラインの両方で参加者は集い、活発な議論も交わされた。スペインやイタリアといった他の地域の現代作品も、報告者やフロアから紹介された。そのほか、冷戦期とはいえ新たな情報の広がり、東欧やドイツ語圏の文学言語に結実したのだろう。その例として他に、今日の日本でもあまり知られていない蜂谷道彦『ヒロシマ日記』（55年）が多く言語に翻訳されたが、多様なプロパガンダの目的で、各国が資料購入したのではないかと、といった応答が相互になされた。そうした関連作品が旺盛な50、60年代に比べて、その後の70年代は東欧でも日本でもどうなのか調査したい、という発言もあった。

核は開発時の極秘性にもかかわらず、ヒロシマ・ナガサキでの使用はもとより、太平洋などにおける核実験による爆発にまでなると、結局、事実と問題は公けにならざるを得ない。かつ製造した国・爆発させた場所を、放射能汚染はボーダレスに越えていくこと（への科学的恐怖）、などがまさにボーダレスに文学作品に共有される始まりだったのではない

か。今回の報告者によるこの問題提起を受けて、そのようなボーダレスな影響は人間界のみならず、陸上や海洋の動物など地球のあらゆる生命にも及ぶ。そのように影響を受ける「異人」のことを想う＝「異人」に代弁させる、というボーダレスを得意とするのが、まさにジャンルとしての詩や童話だろう。そうしたジャンルは、人間が造り出す危機を、想像と事実とで地平を広げて見つめるのではないか、との議論もなされた。

今後もこのテーマのもと、ロシア・アジアはじめ他地域の詩や文学言説へも対象を広げ、この研究ワークショップを続ける予定である。

ワークショップ「核をめぐる文学的想像力」

日時：2024年10月4日（金）17時40分～

場所：東京外国語大学 総合文化研究所 会議室（422）

主催：東京外国語大学 総合文化研究所

ブルナ ルカーシュ (実践女子大学)

「チェコ語と  
スロヴァキア語の原爆詩」

西岡 あかね (東京外国語大学)

「ドイツ語の原爆詩」

司会：久野量一 (東京外国語大学)

2024年

10/4(金)

17:40~19:40

東京外国語大学

総合文化研究所  
会議室(422)

核

ワークショップ

文学的想像力  
をめぐる

主催：総合文化研究所  
参加無料



←オンラインでも参加できます  
ミーティングID: 827 6989 1616  
パスコード: 608167